

ブラスバンド人生を振り返って

西田 裕(日本ブラスバンド指導者協会会員)

1975年4月26日、奇しくも私の24歳の誕生日だったが、イングランド西部地区のブラスバンド・コンテストがブリストルの町で開かれた。朝早くにロンドンを発ち、開演に間に合った。ユースバンドの部門からスタートしたが、8~9歳の女の子が、まだ手に余るほどのコルネットを構え、奏でる音色は正にコルネットの響き。バンド全体もテクニックこそ覚束ないが、本格的なブラスバンドのサウンドを作っていた。この子供たちはイギリスのブラスバンド環境の中で自然と身に着けて来たのだろう。1950年、デニス・ライト氏が、当初は周囲が反対する中、ユースバンドの設立を推進してきた結果でもある。午後になってチャンピオンシップ・セクションのコンテストが始まった。課題曲はエリック・ボール作曲の「ジャーニー・イントゥー・フリーダム」。10団体ぐらゐの演奏を聞いたが、取り分け感動的だったのはスタンショウと言うバンドであった(後に「フラワーズ・ブラスバンド」と名称を変えた)。一糸乱れぬ速いパッセージ、弱奏から歌い上げてゆくクライマックス、最後の小節に飛び込んだ途端に、割れんばかりの拍手喝采とスタンディング・オベーション、思わず感涙し、本場のブラスバンドを聞いて衝撃を受けた瞬間であった。作曲者として会場に来ていたE.ボール氏と二言三言ご挨拶したのが、私にとって初めての英国のブラスバンド人との交流である。二人目は、直後、ロンドンへの帰り道、駅で偶然話しかけてきたウィリアム・レルトン氏でコンテストの審査員を務めていた音楽家だった。電車の中での2時間の語らいが、ブラスバンドに一層はまってし



まったきっかけとなる。半年間のイギリス滞在中にもっともっとブラスバンドを勉強したくなった私は、レルトン氏が紹介してくれたジェフリー・ブランド氏のオフィスを翌週末に訪ねていた。彼はブラック・ダイク・ミルズ・バンドの前指揮者で、はるばる日本から来た大学生に毎週のようにブラスバンドについて個人教授をしてくれた。時を同じくして彼のオフィスに書きかけのスコアを持ってアドバイスを受けに来ていた大学生が、若き日のフィリップ・スパーク氏だったのだ。

帰国後に、長坂利一氏と共に設立したのが、ザ・バンド・オブ・ザ・ブラック・コルト。その後、一歩一歩とブラスバンドにはまり足が抜けなくなったのは言うまでもない。

1995年から始まった吹奏楽やブラスバンドの専門ラジオ番組「ザ・バンドワゴン」を担当し、20年間続いた番組をこの3月で卒業するが、長い期間には無数のブラスバンドの演奏も紹介して来た。毎年のようにイギリスやベルギー、スウェーデン、スイス、オーストラリア、ニュージーランドとブラスバンドの取材にも伺った。各地のブラスバンド人との絆が出来たことは、何にも替え難い宝物である。番組が終わることでこれからは訪欧のチャンスも少なくなるだろうが、少なくとも生涯ブラスバンドを楽しんでゆきたいと思っている。冒頭でお話したが、日本のブラスバンドの発展のためにも、JBBAの会員が自治体などと連携し、日本各地にユースバンドが設立されることを心から願っている。